

鶴田知也「コシヤマイン記」論

——アイヌ表象と芥川賞受賞について——

弘前大学人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース

22H1044 紺谷琢磨

(日本近現代文学ゼミ)

序章

本論文は、第三回芥川賞を受賞した鶴田知也の小説「コシヤマイン記」(1936)について、アイヌ表象の分析と文学場の分析を通じて、1935年前後のアイヌに関する言説に対する位置付けと芥川賞受賞が持つ文学史的な意味を明らかにしたものである。

「コシヤマイン記」は、強権的な「日本人」に対する蜂起を目指すアイヌのコシヤマインが、それを果たせずに「日本人」労働者の「欺し討ち」によって殺される物語であり、題材の新奇性や「叙事詩的」とされる文体が評価点となり芥川賞を受賞した。

従来の研究では、同時代の日本の植民地主義に対する鶴田の批判的な視点と、それを表した作品として「コシヤマイン記」の批評性が繰り返し論じられてきた。植民地主義への批判として本作を評価する研究は、アイヌや北海道に関する植民地主義への批判とする立場と、同時代の寓話であると解釈して朝鮮や満州における植民地支配への批判とする立場の二つに大別できる。だが、アイヌが置かれた状況と満州や朝鮮における植民地主義的な状況は、必ずしも重なるとは限らない。また、鶴田自身の発言を根拠に、その作家としての姿勢が評価される一方で、同時代のアイヌに関する言説や文学場の状況に対する鶴田作品の位置や、本作が芥川賞を受賞している点については十全に論じられてきたとは言いがたい。そのため、本論文ではアイヌを描いた小説という点を重視して「コシヤマイン記」を論じ、小説が発表された同時代状況に注目することで、本作のアイヌ表象と芥川賞受賞が同時代に意味したものを考察した。

第一章 「コシヤマイン記」のアイヌ表象

本章では「コシヤマイン記」におけるアイヌ表象を主に物語内容に着目して論じ、テキストが同時代の日本社会におけるアイヌに対するステレオタイプを強化してしまう点を明らかにした。その上で、ステレオタイプからの逸脱を読み取ることを試みつつ、アイヌを描いた小説「コシヤマイン記」を植民地主義批判として評価することの限界を論じた。

第一節では、明治期以降にアイヌが置かれた状況を踏まえて、1930年代のアイヌに関する言説を学術研究の領域を中心に整理した。近代化に伴い、社会進化論を根拠として「劣等」な「滅びゆく民族」としてアイヌを見做す、差別的なステレオタイプが日本社会に浸透した。また、ステレオタイプはアイヌに対する政策にも見られ、そのような政策は帝国日本の他の植民地の先例にもなった。そして、「コシヤマイン記」が発表された1930年代は、植民地に

おける異民族への関心の高まりとともに、民族の「血」の優劣を決める優生学の影響を受けた「日本民族衛生学会」が主導する研究がアイヌに対して行なわれる。当時、民族に関する議論は国策と不可分の関係にあり、アイヌの研究が推進される背景には対外進出を続けて膨張する帝国の内部における民族の問題があった。和人とアイヌの「血」に差異があることを前提とした優生学の研究は、両者の身体を優劣関係で説明することで、既存のステレオタイプを強化する役割を果たしたといえる。

第二節では「コシヤマイン記」の記述が、前節で確認したアイヌに対するステレオタイプを強化してしまう点について三つの要素に着目して論じ、アイヌの身体を「日本人」と差異化する力学を明らかにした。「血統」に注目すると、物語では「日本人」への抵抗がアイヌの「血統」とともに語られており、コシヤマインが「敗北」する物語の結末は、「日本人」とは異なるアイヌの「血統」の断絶を暗示するといえる。また、「病」に注目すると、コシヤマインの母シラリカが発症する「イム」は、「アイヌ民族獨得」の「精神病」とされており、「日本人」の鉄砲の音によって引き起こされる。物語において鉄砲は「日本人」が「勝れてゐる」ことの象徴とされているため、「イム」という「病」の存在は優位な「日本人」と、それに「敗北」する病んだ身体を持つアイヌという、両者の優劣を印象づける。そして「子を産む気配」がないコシヤマインの妻ムビナに注目すると、妊娠しないムビナは「イム」を発症するシラリカと同じく、病んだものとされている。これらの要素による、アイヌの身体を「日本人」と差異化する力学は、コシヤマインが「日本人」に「敗北」する物語と結びつくことで、「劣等」なアイヌが「滅亡」するというステレオタイプを強化するといえる。

第三節では、ステレオタイプを逸脱する記述をテキストから見出すことを試みた。小説の第十四章に登場する「哀れ」な「日本人」は「ニシパ（頭）」に雇われた労働者であり、虐待から逃れるために瀕死の状態でコシヤマインの前に現れ、それまでアイヌの身体を特徴づけていた「血」や「病」とともに語られる。「日本人」の身体が前景化している第十四章では、それまで優位に置かれていた「日本人」の立場が揺さぶられており、この点はステレオタイプを強化するテキストに生じた綻びとして評価できる。しかし、物語はコシヤマインが「日本人」労働者に殺されることで幕を閉じ、アイヌの身体を「日本人」と差異化する力学に回収されてしまう。テキストにはアイヌに対するステレオタイプを相対化する要素よりも、強化する要素が圧倒的に多い。そのため、「コシヤマイン記」を同時代のアイヌが置かれた植民地主義的な状況に対する批判として評価するのは困難であると結論づけた。

第二章 鶴田知也のアイヌ表象と「コシヤマイン記」の芥川賞受賞

本章では、プロレタリア文学運動の影響を受けた鶴田の他作品のアイヌ表象を確認した上で、1935年前後の文学場の状況を芥川賞に注目して論じ、当時の文学場において作家鶴田が占める位置と「コシヤマイン記」の芥川賞受賞の同時代における機能を明らかにした。

第一節では、鶴田の小説「闇の怒」（1929）、「ベンケル物語」（1933）におけるアイヌと和人の描かれ方を確認し、鶴田の作家活動における「コシヤマイン記」の位置づけを試みた。

「コシヤマイン記」はアイヌを題材にした初めての小説ではなく、鶴田はそれ以前から自身の作品にアイヌを登場させていた。資本家／労働者、和人／アイヌという構図が併存する「闇の怒」、左翼運動の内紛の寓話としてアイヌ部落の抗争を描いた「ペンケル物語」の二作品において鶴田は、プロレタリア文学運動に主眼をおいているものの、和人／アイヌの関係を描いている。二作品の延長線上に位置づけると、「コシヤマイン記」は和人労働者とアイヌの関係を「叙事詩的」とされる文体で描いた作品といえる。和人労働者とアイヌを描くことには、和人労働者が資本家による被抑圧者にも、アイヌに対する抑圧者にもなり得るといふ二面性を浮かび上がらせる可能性が存在していたはずである。しかし、そのような二面性はコシヤマインが「日本人」労働者に殺される物語によって、和人／アイヌという一つの構図に収められてしまう。そして、「闇の怒」、「ペンケル物語」から「コシヤマイン記」へと至る鶴田作品におけるアイヌ表象の変遷は、プロレタリア文学から離れ、和人優位のステレオタイプに当てはめてアイヌとの関係を描いていく、鶴田の作家活動の軌跡といえる。

鶴田の創作遍歴を踏まえて、第二節では「コシヤマイン記」に価値を見出した芥川賞と同時代の文学場の状況を確認した。プロレタリア文学の崩壊や、戦時体制の強化が進行した1935年前後の文学場では、文学の新奇性が求められており、そのような状況を鶴田も意識していたことが、芥川賞受賞後の発言から窺える。着目したいのは、文学の新奇性の希求が、それまで扱われてこなかった題材への注目につながり、特に「外地」や異民族が重要視された点である。このような題材偏重を示したのが1935年に創設された芥川賞であり、日本の「外」を題材とした作品の顕彰は、対外進出を加速させる国策と不可分の関係にあった。第三回までの芥川賞受賞作を挙げると、第一回が石川達三「蒼氓」、第二回が受賞作なし、第三回が鶴田知也「コシヤマイン記」と小田嶽夫「城外」である。第二回の受賞作がなかったことを考慮すると、第一回で示された題材の傾向を決定づけたのが、第三回芥川賞だったといえるだろう。「コシヤマイン記」の芥川賞受賞は、戦時体制下の芥川賞の方向性を決定づける出来事だった。そして、同時代の状況に鶴田も意識的であった上、プロレタリア文学から離れ、次第にアイヌや農民を描いていく鶴田の作家としてのあり方が、当時の文学場の状況に合致していたともいえる。

第三節では、同時代の文学場の状況を踏まえて「コシヤマイン記」の受容の様相をあらためて分析し、芥川賞受賞が意味したものを考察した。本作に対する同時代の評価を確認すると、題材に対する作者の姿勢やプロレタリア文学との関連を問う言説は、婉曲的な表現がなされるか批判されている。一方で、アイヌを「古代」性や「原始性」を持つものと見做す認識を前提として、文体や題材を文学の新奇性として評価する傾向が強くみられる。和人／アイヌの関係を優劣として描く「コシヤマイン記」の芥川賞受賞と、小説に対する評価軸が固定化しつつある同時代の状況は、言論統制の影響で国策に迎合する作品が増加する文学場を暗示していたといえる。戦時体制下で「外地」や異民族が文学の題材として評価されはじめるなかで、「コシヤマイン記」の芥川賞受賞によって、文学の題材としてアイヌは見出されたのである。

終章

本論文は鶴田知也の小説「コシヤマイン記」を同時代の状況に注目して論じた。アイヌ表象に注目すると、同時代のステレオタイプを揺さぶる記述がわずかに見出せるものの、ステレオタイプを強化する記述の方が圧倒的に多く、植民地主義への批判として評価することは難しいと考えられる。そして、文学場の状況に注目すると、本作の芥川賞受賞は国策に迎合する戦時体制下の文学場を予感させると同時に、日本の近代文学のなかでアイヌが注目される契機でもあった。以上を踏まえると、「コシヤマイン記」とその芥川賞受賞は、文学場においてアイヌが題材としてまなざされると同時に、戦時体制下の芥川賞の方向性を決定づける出来事であったといえる。したがって、「コシヤマイン記」は日本の近代文学とアイヌ表象を考える上で見逃すことができない小説である。

【主要参考文献】

- ・神村和美「鶴田知也のアイヌ表象——二つのアポリアをめぐる——」（『リベラシオン』第189号、2023年3月）
- ・川村湊「移民と棄民——移民文学論序説」（『国文学』第44巻12号、1999年10月）
- ・東條慎生「裏切り者と英雄のテーマ——鶴田知也「コシヤマイン記」とその前後」（岡和田晃編『北の想像力 《北海道文学》と《北海道SF》をめぐる思索の旅』寿郎社、2014年5月）
- ・東條慎生「鶴田知也再考——『リベラシオン』第一八九号を読む」（『リベラシオン』第190号、2023年6月）
- ・内藤千珠子『帝国と暗殺』（新曜社、2005年10月）
- ・西成彦「先住民文学の始まり——『コシヤマイン記』の評価について」（『外地巡礼』みすず書房、2018年1月）
- ・松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える』（立教大学出版会、2015年3月）
- ・リチャード・シドル『アイヌ通史「蝦夷」から先住民へ』（マーク・ウィンチェスター訳、岩波書店、2021年7月）
- ・『文藝時評体系 昭和篇Ⅰ』第13巻（ゆまに書房、2007年10月）